大分市歴史資料館年報

（平成６年度）

1995

はじめに

平成６年度の年報をお届けします。

本年度も従来通り各種講座を実施し好評を得ております。ただ開館以来続けてきた実技講座については歴史資料館にふさわしいかどうか見直し・検討の時期に入っていると感じております。また歴史講座、映画会等も積極的に市民の要望に答えられるように改善をはかりながら努力しております。

継続した研究調査事業であります「府内及び大友氏関係遺跡総合調査事業」は本年度も柞原宮周辺及び大山寺を対象に実施しました。大山寺観音堂境内試掘調査、九州大学文学部美学美術史研究室に依頼した仏像調査で大きな成果を上げ、来年度にもその成果を展示公開する事を計画しております。

今後も、市民の歴史学習の拠点として、また生涯学習の場の一つとして活動して行きたいと思っておりますので、市民の皆様の積極的なご利用とご協力をお願い致します。

1995年３月31日

館長　木村　幾多郎

目　　次

展　　示 …… 1

テーマ展示　特別展示

講演記録 …… 4

資料調査 …… 11

研究ノート …… 12

教育普及活動 …… 23

資料収集 …… 26

図　　書 …… 30

資料館利用状況 …… 36

管理及び運営 …… 38

歴史資料館協議会　組織・職員

決算　施設管理業務の内容

施設の概要 …… 40

条例・規則 …… 42

日 誌 抄 …… 48

利用案内 …… 50

展　　示

テーマ展示

本年度は以下のテーマで４回開催した。

第１回　府内の殿様　大給松平氏

期間　４月26日～６月25日　入館者数　5142人

江戸時代に、一番長く府内藩主の座にありながらも、市民にあまり知られていない大給松平氏を紹介するため、同家ゆかりの具足や藩主が描いた絵画、大名行列道具などを展示した。

展示資料

初代府内藩主松平忠昭画像（浄安寺蔵）／松平氏所用青糸威五枚胴具足（松栄神社蔵）／５代近形作　十六善神王図（仏光寺蔵）／近形・近儔他作　十二天尊像図（福寿院蔵）／６代近儔作　白鷹図（秦野晃郎氏蔵）／賀来神社の大名行列道具（賀来地区蔵）／６代近儔作　児島高徳騎馬図／歴代藩主書状／藩主使用の山水図蒔絵印籠／釘貫紋散らし蒔絵文箱／御城下絵図／府内藩家老家伝来武具（以上当館蔵）

第２回　大分市の新発見遺跡

期間　７月２日～９月23日　入館者数　3390人

ここ数年間に大分市内で発見された新しい遺跡を紹介した。

展示資料

大分川採集縄文土器片（個人蔵）／同土偶（個人蔵）／浜遺跡出土弥生土器／府内城三の丸遺跡出土遺物（以上大分県教育委員会蔵）／久原遺跡出土弥生土器／下郡遺跡出土木器／亀塚古墳出土埴輪（以上大分市教育委員会蔵）

第３回　南蛮文化とキリシタン

期間　12月３日～１月28日　入館者数　1876人

これまでの当館蔵南蛮関係資料に、平成５年度に収集した新しい資料を加えて開催した。

展示資料

花鳥文螺鈿蒔絵洋櫃／鮫皮貼螺鈿洋櫃／南蛮人図鏡／南蛮鐔／ランタカ砲／南蛮屏風（模写）マッフィ編『イエズス会士書簡集』所収の大内義長大道寺建立裁許状／キリシタン禁令高札／五榜の掲示／『キリスト教の勝利』／『日本の花束』／真鍮踏絵（複製）／オルテリウス　東インド図・アジア図・タルタリア図／ティセラ日本図（以上当館蔵）

第４回　地図と写真にみる近代の大分

期間　２月４日～３月31日　入館者数　2553人

明治時代から昭和初期までの大分市・大分県の地図と市内各所の写真を展示し、近代化していく大分の様子を紹介した。

展示資料

昭和16年頃の大分市街地復元図　６点（加藤貞弘氏蔵）／明治～昭和初期の各種大分市街地図明治40年大分県写真帖／大正初期大分写真帖／大正10年九州沖縄八県連合共進会関係資料（以上当館蔵）

パソコンクイズ

２本のソフトを製作し、既存のものに追加した。これで学習クイズは計８本となった。

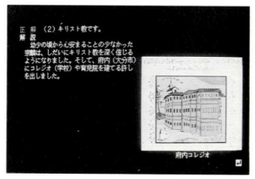
①豊後大友氏の人物伝クイズ

歴代大友氏当主から初代能直・３代頼泰・20代義鑑・21代宗麟・22代吉統を選らび、それぞれのエピソードを紹介するクイズ。

②大分の伝説クイズ

大分市にまつわる伝説を紹介するクイズ。取り上げた伝説は以下の３つである。

- 豊後の弓名人－百合若伝説（４問）
- サルの恩返し－サル酒伝説（３問）
- 沈んだ島－瓜生島伝説（３問）



特別展示

第13回特別展　　豊かなる海－瀬戸内と豊後

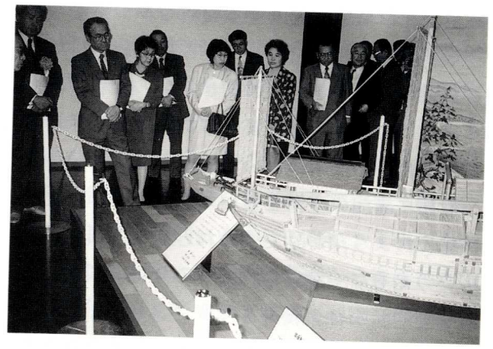
この特別展は縄文時代以来豊後地方が瀬戸内海を通じ、瀬戸内地方さらには畿内と取り持っていた交流の歴史を政治・経済・文化の各方面から紹介し、豊後の人々が瀬戸内海に面していることを最大限に生かし生活していたこと、海が人と人、地域と地域を結ぶ重要な役割を果たしていたことを再認識できるよう企画した。

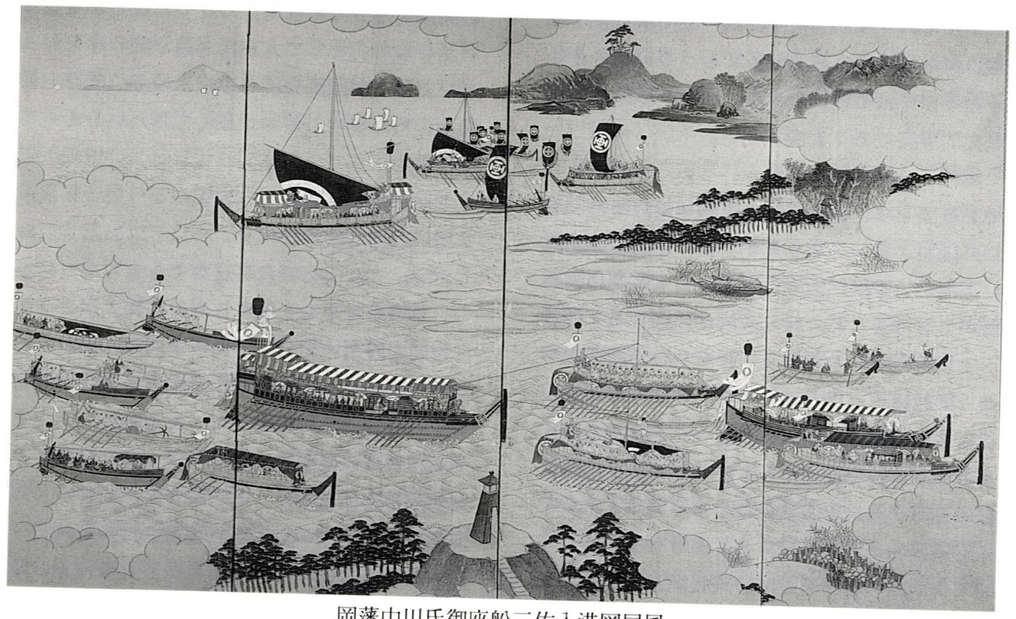
なお、11月6日(日)には福岡大学教授川添昭二氏を招き、「日本中世における国際交流」と題して記念講演会を実施した。

会　　期：平成6年10月28日(金)～11月27日(日)
会　　場：第2展示室・特別展示室
開館日数：25日間
入館者数：5、699人　出品点数：59件 162点

出品目録

番号	資料名	点数	所蔵者
1	大阪府長原高廻り2号墳 船形埴輪(重文)	1	文化庁
2	京都府ニゴレ古墳 ①船形埴輪 ②甲冑形埴輪 ③椅子形埴輪	3	京都大学文学部博物館
3	国東町羽田遺跡　石核	3	国東町教育委員会
4	福岡市有田七田前遺跡 ①壺形土器 ②甕形土器 ③鉢形土器	3	福岡市埋蔵文化財センター
5	松山市大渕遺跡 ①甕形土器　2 ②石包丁・石鎌　4	6	松山市立埋蔵文化財センター
6	大分市下黒野遺跡　土器片	10	大分県教育委員会
7	大分市稙田市遺跡　土器片	10	大分県教育委員会
8	大分市久原遺跡 甕2　壺1　高杯1	4	大分市教育委員会
9	東広島市西東子遺跡　壺	1	東広島市文化財センター
10	松山市東雲神社遺跡　甕	1	松山市立埋蔵文化財センター
11	松山市来住廃寺遺跡　高杯	1	〃
12	松山市文京遺跡　高杯	1	愛媛大学
13	松山市祝谷・アイリ遺跡 分銅型土製品	3	松山市立埋蔵文化財センター
14	大分市浜遺跡 中広銅剣（複製）	1	大分市歴史資料館
15	大分市清水ヶ迫遺跡 銅剣（複製）	1	大分市歴史資料館
16	伝宇和町出土　平形銅剣	1	松山市立埋蔵文化財センター
17	松山市祝谷六丁場遺跡 銅剣（復元模型）	1	松山市立埋蔵文化財センター
18	伊予市上野向山遺跡　銅矛	1	伊予市教育委員会
19	大分市名辺山遺跡　銅矛	1	小野忠彦氏
20	大分市松岡遺跡 銅矛（複製）	1	大分市歴史資料館
21	宇佐市小向野遺跡 広形銅矛	1	大分県立宇佐風土記の丘歴史民俗資料館
22	前原市三雲屋敷田遺跡 銅矛鋳型（重文）	1	九州大学文学部
23	小郡市津吉遺跡　銅矛鋳型	1	小郡市埋蔵文化財センター
24	宇佐市別府遺跡 朝鮮式小銅鐸	1	宇佐市教育委員会
25	香川県三木町出土　銅鐸	1	辰馬考古資料館
26	宇佐市小部遺跡 ①製塩土器片　1 ②土錘　5　③蛸壺　5	11	宇佐市教育委員会
27	愛媛県宮前川遺跡 古式土師器－壺、甕、器台	3	愛媛県教育委員会
28	愛媛県大三島　製塩土器	6	〃
29	大分市守岡遺跡古式土師器 甕1、小型　丸底壺2	3	大分市歴史資料館
30	大分市浜遺跡 古式土師器－鼓形器台	1	大分県教育委員会
31	宇佐市赤塚古墳 鏡3　土器片1	4	大分県立宇佐風土記の丘歴史民俗資料館
32	藤井寺市野中古墳　鉄挺	6	大阪大学文学部
33	宇佐市免ヶ平古墳 鏡2　鉄刀1　刀子5 碧玉製石釧3　鉇1 有肩鉄斧1　鎌2	15	大分県立宇佐風土記の丘歴史民俗資料館
34	松山市朝日谷2号墳 銅鏡1　銅鏃3　鉄剣3 土器1	8	松山市立埋蔵文化財センター
35	今治市相の谷1号墳　鏡	2	愛媛県教育委員会
36	臼杵市下山古墳 鉄挺10　鉄剣1 管玉・勾玉　1連	12	臼杵市教育委員会
37	宇佐市虚空蔵寺　瓦	1	宇佐市教育委員会
38	松山市来住廃寺　瓦	2	松山市立埋蔵文化財センター
39	西海筋海路図屏風	1双	堺市博物館
40	遣明船復元模型	1	広島県立歴史博物館
41	杵築藩御座船模型　八幡丸	1	若宮八幡社
42	杵築藩御座船「大成丸」額	1	きつき城下町資料館
43	瀬戸内海航路絵巻	1	堺市博物館
44	岡藩御座船三佐入港図屏風	1隻	個　人
45	熊本藩御座船鶴崎入港図	1	大分市歴史資料館
46	熊本藩御座船　船飾り	1	藤沢大治 氏
47	厳島神社遊興図屏風	1双	首藤規行 氏
48	別府湾鳥瞰図巻	1	大分市歴史資料館
49	富嶽三十六景　上総ノ海路	1	大分県立芸術会館
50	「広益国産考」巻三	1	大分県立大分図書館
51	「広益国産考」巻三	1	大分市歴史資料館
52	七島藺ヘギ	1	大分市歴史資料館
53	七島莚印コテ	1	きつき城下町資料館
54	七　島　莚	2	〃
55	府内新港分間絵図	1	大分県立大分図書館
56	御船小倉・京泊番所絵図	1	松栄神社
57	大分町絵図	1	大分市歴史資料館
58	堀川埋立設計図	1	〃
59	大分築港計画図	1	〃





岡藩中川氏御座船三佐入港図屏風

研究ノート

大分平野周辺の磨消縄文土器の編年

－大分川河床採集の縄文土器の紹介を兼ねて－

坂本嘉弘

1．はじめに

由布岳の麓に源を発する大分川は、県都大分の中心部を北流し、別府湾に注ぐ一級河川である。河口付近は、6キロ上流まで潮の干満の影響を受け、干潮時には河床の一部が露われる。こうした部分で縄文時代や弥生時代の遺物が採集されることが1989年頃から知られており、すでに一部は紹介されている。[1] それによると、採集遺物は縄文時代から古墳時代にわたるが、最も多いのは縄文時代後期後半から晩期にかけての土器である。今回は、こうした採集活動を行なっている松浪久泰氏の資料のうち、縄文後期前半以前の土器を紹介する。あわせて、大分平野周辺でこれまで調査された小池原貝塚と横尾貝塚の資料を検討し、大分平野周辺の磨消縄文土器の編年を試みる。

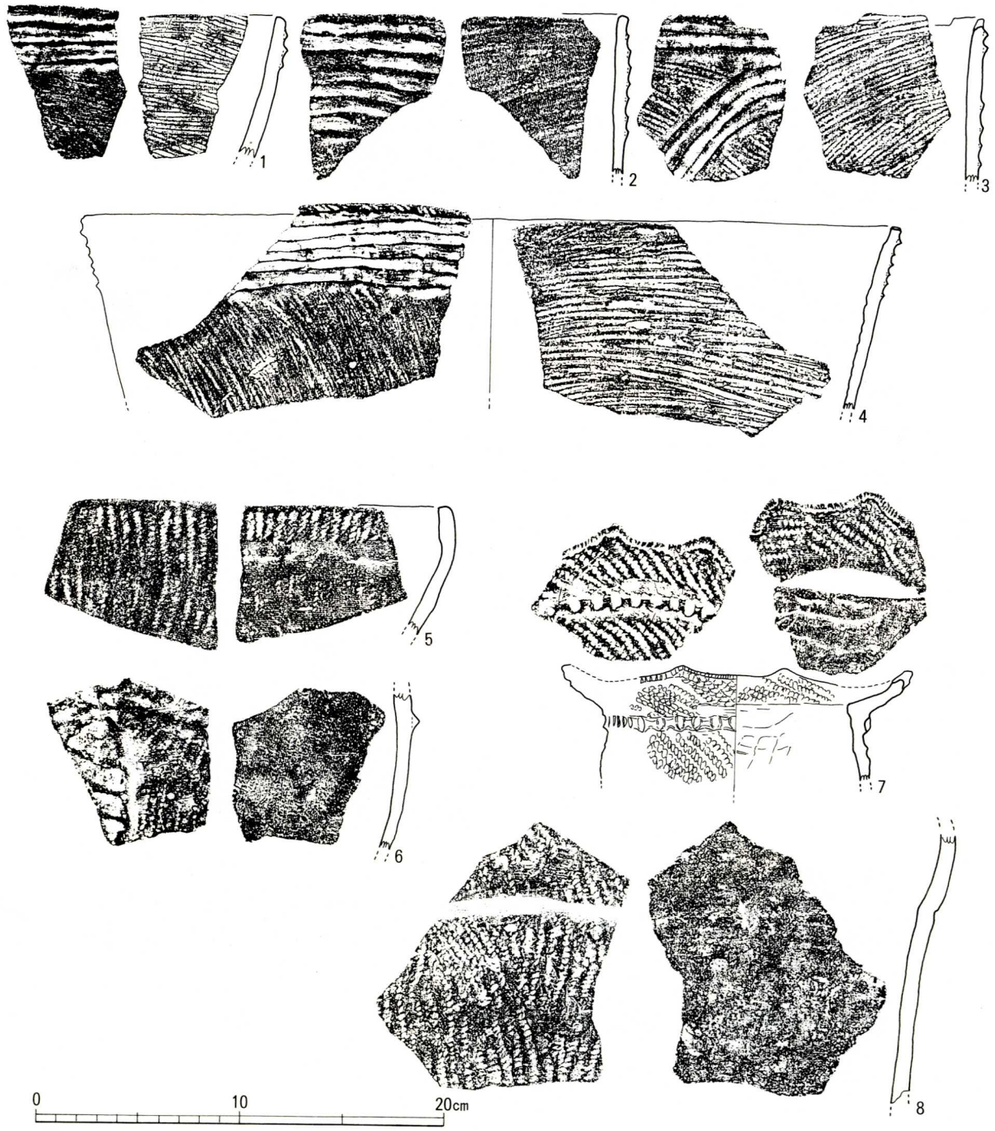
2．大分川河床採集の縄文土器

大分平野及びその周辺の縄文時代の遺跡は、縄文早期の庄原遺跡・野田山遺跡、前期の横尾貝塚・小池原貝塚最下層、中期の横尾貝塚、後期の小池原貝塚・横尾貝塚・下郡遺跡群・上片面遺跡などが知られていた。こうした中で採集された大分川河床の縄文土器は早期以外の全ての時期が見られる。このうち、縄文後期前半以前と前期・中期の土器は縄文時代の遺跡が少ない大分平野にあって、貴重な資料と言える。

第2図1～4は縄文前期の轟B式土器である。全て口縁部の資料で、外面に細い粘土を数条廻らせた特徴的な文様が見られる。5～8は縄文中期の瀬戸内系の土器である。器形は口縁部がキャリパー状になり、胴部外面から口縁部内面にかけて縄文が施文されている。

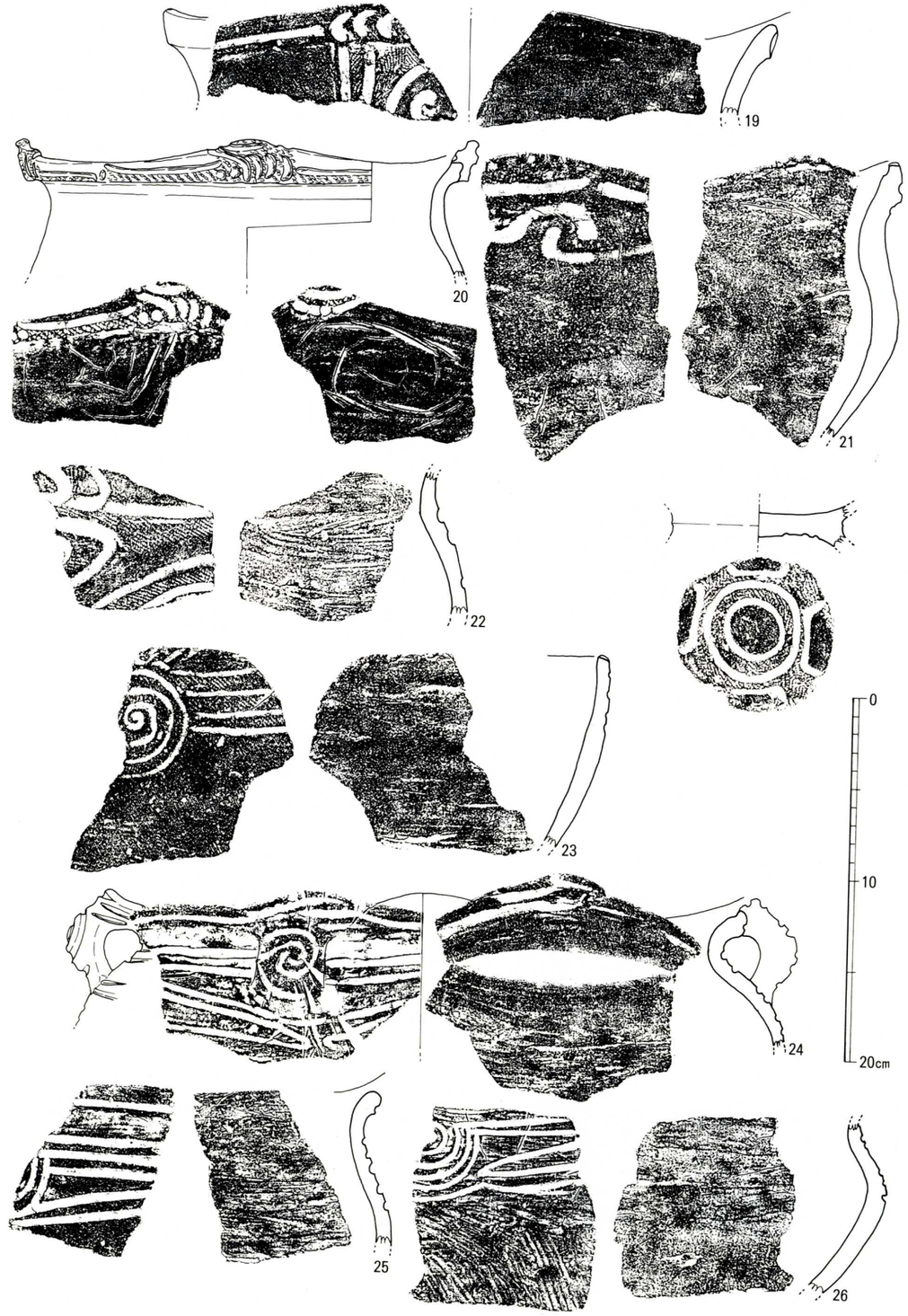
第1図　大分平野及び周辺の縄文時代遺跡　1．大分川河川敷1遺跡　2．大分川河川敷2遺跡　3．大分川河川敷3遺跡　4．大分川河川敷4遺跡　5．小池原貝塚　6．横尾貝塚　7．上片面遺跡　8．庄ノ原遺跡　9．六重原遺跡　10．下郡遺跡群

第3図9～10は口縁部外面に太い沈線で文様を描き、口唇部に太い刻目を加えている。この土器は、西九州に分布の中心を持つ縄文中期の阿高式土器及びその系譜を引く西和田式土器であり、縄文中期後葉から縄文後期初頭である。12は鉢形土器で、3本の沈線を単位に文様を描くが、規則性が乱れてている。13は、波状口縁部の内面に稜を生じて屈曲する鉢形土器で、文様は磨消縄文が施文されている。12・13は縄文後期初頭の瀬戸内地方の福田KⅡ式土器と関連する土器と考える。14は沈線で区画された内側に刺突文を加えたものである。15は波状口縁の外面に刻目のある突帯を張り付け文様としている。14は東九州でコウゴー松式土器と言われているもので、15もそれに伴うものである。時期は13とほぼ同じ後期前葉と考える。16～23は大

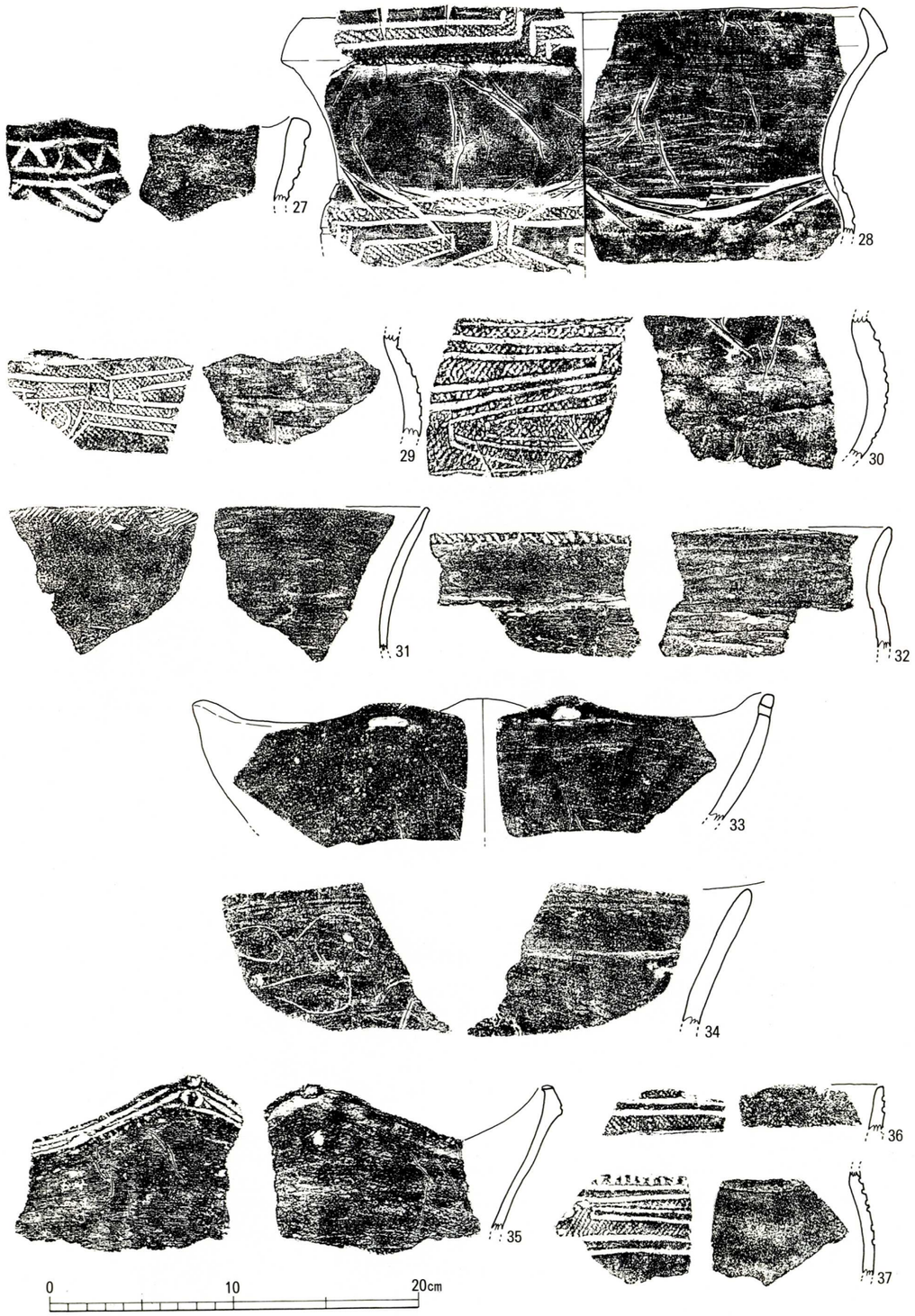


第2図　大分河床採集縄文土器実測図(1)

第３図　大分川河床採集縄文土器実測図(2)



第４図　大分川河床採集縄文土器実測図(3)



第５図　大分川河床採集縄文土器実測図(4)

分市小池原貝塚出土の土器を標式としている小池原上層式土器である。この土器のうち、16～18の口縁部文様帯の幅が広いのは19～21の土器に比較すると古く位置づけられる。また、23はこの時期の鉢形土器であり、24は高い高台状の底部の内面に磨消縄文が施文されている。25～27は小池原上層式土器に比較すると口縁部が短い鐘崎式土器である。文様から縄文が消え、沈線文のみで描かれる。28～30は鐘崎式土器に後続する北久根山式土器と並行する東九州の土器である。頸部が長く伸び無文帯となり、文様は口縁部と胴部に集中する。31・32は口縁部に縄文が施文される土器である。これらは16～31の土器に伴うものである。34・35は無文土器であるが、34は波状口縁になり、波状部は把手状になる。35の外面には細い沈文が見られるが意図

図面番号	遺物番号	文様の特徴と器面調整の方法及び色調 外面	色調	内面	色調	胎土 角閃石	斜長石	石英	その他	備考
1	1	条痕→隆帯文→ナデ	茶黒色	条痕	茶褐色	○	○			
	2	隆帯文→ナデ	黒褐色	条痕→ナデ	薄茶色	◎	○		赤色粒	磨滅している
	3	条痕→隆帯文　口唇部に浅い刻目	灰褐色	条痕	灰褐色	○		○		口縁部に突起部がある
	4	条痕→隆帯文→ナデ　口唇部に浅い刻目	灰黒色	粗い条痕	茶褐色	○	○			
	5	縄文　口縁部は肥厚	茶褐色	縄文の下位はナデ	茶褐色	◎	○			
	6	縄文→突帯→刻目　口唇部も刻目	茶褐色	縄文 胴部はヘラ状工具で調整	茶褐色	○		○		2単位の波状部が4ヶ所
	7	縄文→突帯→ナデ	黒褐色	ナデ	茶褐色				赤色粒	磨滅
	8	縄文→一部ナデ	茶褐色	ナデ	明褐色	○	○	○		
2	9	ナデ→凹線文→口唇部刻目	灰褐色	条痕→ナデ	灰褐色	○	○			
	10	ナデ→凹線文→口唇部刻目→ナデ	茶褐色	横方向のナデ	茶褐色	○	○			磨滅している
	11	条痕→凹線文→ナデ	黒褐色	条痕→ナデ	暗茶褐色	○	○			著しく磨滅している
	12	縄文→沈線→ヘラ研磨	茶黒色	横ヘラ研磨	茶褐色	○	○			磨滅している
	13	縄文→沈線→ヘラ研磨→赤色顔料	黒褐色	入念な横ヘラ研磨	黒褐色	○	○			
	14	条痕→ナデ→沈線・刺突	茶褐色	条痕→ナデ	黒褐色	○	○			磨滅 上部の割口は不明
	15	ナデ→刻目突帯→口唇部刻目	灰茶色	横ナデ　一部に条痕が残る	茶褐色	○	○			
	16	縄文→沈線→ヘラ研磨	茶褐色	条痕→横ヘラ研磨	茶褐色	○	○			
	17	縄文→沈線→ヘラ研磨	茶褐色	条痕→横ヘラ研磨	茶褐色	○	○			
	18	条痕→沈線→ナデ	茶黒色	条痕→ヘラ研磨	茶褐色	○	○			
3	19	細かい縄文→沈線→ヘラ研磨	明褐色	横ヘラ研磨	黒褐色	○	○			
	20	縄文→沈線→ヘラ研磨	茶黒色	横ヘラ研磨	茶黒色	○	○		白色粒	
	21	沈線文のみ 波状口縁頂部に刻目	黒褐色	ヘラ研磨？	茶褐色	○	○			磨滅が著しい
	22	縄文→沈線→ヘラ研磨	白茶色	巻貝条痕	灰茶色	○				
	23	沈線→縄文　口唇部に刻目	黒褐色	横ヘラ研磨	黒褐色	○	○			磨滅
	24	縄文→沈線→ヘラ研磨　くびれ部は横ナデ	茶褐色	ヘラ研磨	黒褐色	○	○			
	25	ナデ→沈線→ナデ	茶褐色	条痕→ナデ・ヘラ研磨	茶褐色	○	○			
	26	ナデ→沈線→ナデ	茶褐色	条痕→ヘラ研磨	灰茶色	○	○		金雲母	
	27	条痕→沈線→ナデ	茶褐色	条痕→ヘラ研磨	黒褐色	○	○			
4	28	沈線文　波状口線	黒褐色	ナデ？	黒褐色	○		○		著しい磨滅
	29	縄文→沈線→ヘラ研磨→赤色顔料	黒褐色	横ヘラ研磨	茶褐色	○	○			
	30	縄文→沈線→ナデ	茶褐色	横ヘラ研磨	茶褐色	○	○			
	31	縄文→沈線	茶褐色	横ナデ	茶褐色	○	○			
	32	ナデ→縄文	暗褐色	横ヘラ研磨	黄褐色	○	○	○	金雲母	
	33	ナデ→縄文→横ヘラ研磨	暗褐色	横ヘラ研磨	暗褐色	○	○	○		
	34	沈線→連続科行沈線→横ヘラ研磨	黒褐色	横ヘラ研磨	黒褐色	○	○			
	35	ヘラ研磨	灰褐色	ヘラ研磨	灰褐色	○	○			
	36	条痕→ヘラ研磨	黒褐色	条痕→ヘラ研磨	黒褐色	○	○			
	37	縄文→沈線→ヘラ研磨	暗褐色	横ヘラ研磨	黒褐色	◎	○			
	38	縄文→沈線→ヘラ研磨	茶褐色	ナデ・ヘラ研磨	白茶色	○	○	○		
	39	縄文→沈線→ヘラ研磨	黒褐色	ナデ・ヘラ研磨	黒褐色	○	○			

的なものではないと考える。34・35は小池原上層式土器または北久根式土器に伴うものと考える。36～38は西平式土器である。37は文様の施文状態からこの型式と考えたが、鉢形土器の可能性がある。

3．大分平野周辺の磨消縄文土器の編年

(1) 横尾貝塚と小池原貝塚の調査と研究

大分市の縄文時代の遺跡として比較的古くから知られていたのは横尾貝塚と小池原貝塚である。この二つの貝塚のうち、横尾貝塚は1918年喜田貞吉が「九州旅行談－横尾貝殻天神（大分市）」として、『考古学雑誌』に報告しており、石器時代のものであることを明らかにしている。しかし、本格的な発掘調査は小池原貝塚の方が先で、1961年に行なわれた。貝塚は貝層が幾層にもわたり厚く堆積しており各層から遺物が出土した。調査者の賀川光夫は、それまで明らかになっていた九州を代表する磨消縄文土器である鐘崎式土器とは形態が異なることや、自ら調査した国東町ワラミノ遺跡調査で得られた鐘崎式土器の細分の見通し、また豊後水道東岸の愛媛県平城貝塚との類似性などから、鐘崎式土器の東九州タイプと理解し、小池原式土器として型式設定した。そして、小池原貝塚の層位的な出土状況に従い小池原Ⅰ式から小池原Ⅴ式まで五型式に編年し、東九州の磨消縄文土器の展開を論じた。[2]

その後、1965年に再び小池原貝塚は調査され、横尾貝塚もはじめて発掘調査が行なわれた。小池原貝塚の調査結果は、貝塚特有の複雑な堆積が見られ、必ずしも前回の調査結果の通りにはならなかったようである。その成果をまとめた前川威洋は貝層下部の土器と上層の土器に差異があることを確認し、小池原下層式土器と小池原上層式土器の２型式に分類し、小池原上層式土器は鐘崎式土器に先行すると考えた。[3]

また、横尾貝塚の調査は小規模であったが、縄文前期の土器を主体とし縄文後期の磨消縄文も僅かながら出土している。

横尾貝塚はその後、1980年から1981年にけて、県道の拡幅工事に伴い発掘調査が行なわれた。その結果、縄文早期から後期にかけての遺物が出土した。なかでも縄文後期の遺物は後期初頭を主体とし、瀬戸内系の中津式土器、九州の縄文中期系の西和田式土器が出土した。[4]

(2) 最近の小池原上層式土器をめぐる問題

小池原上層式土器は前川の設定で、ほぼ編年的位置が確定した。そこで問題となってくるのが小池原上層式土器の成立にかかわる土器である。前川はその土器として瀬戸内地方の福田ＫⅡ式土器を考えていた。しかし近年、近畿地方の縄文後期土器の編年が整備されるに従い、瀬戸内地方から近畿地方に分布する縁帯文土器が注目されるようになった。

この縁帯文土器に対する九州のそれまでの評価は、津雲Ｂ式土器が鐘崎式土器の次に編年される北久根山式土器に影響を与えると考えられていた。しかし1974年に調査した宇佐市西和田貝塚では鐘崎式土器を出土する貝層の下層から、福田ＫⅡ式土器などと一緒に、それまで九州で津雲Ｂ式土器と認識されていた土器が出土した。そこで、1979年に報告者の坂本嘉弘はこの一群の土器を津雲Ｂ式土器から分離することを提案し、鐘崎式土器以前の土器と考えた。[5]

一方、近畿地方での縁帯文土器の研究は泉拓良によって進められ、北白川上層式土器を３期に細分した。1980年に発表されたこの編年案は近畿地方に福田ＫⅡ式土器が主体的に分布しないと言う当時の状況で考えられたもので、縁帯文最古式の北白川上層式土器１期の成立にに関東地方の堀ノ内Ⅰ式土器の影響が認められることを指摘し、瀬戸内地方の福田ＫⅡ式土器に並行すると考えた。[6]

また、田中良之は1980年に調査し1981年と1983年に刊行された荻町寺の前遺跡の報告書で、小池原上層式土器・鐘崎式土器の成立に瀬戸内地方の縁帯文土器がかかわることを指摘し、鐘崎式土器を小池原式土器を含め３型式に細分する編年案を示した。さらに1984年田中は松永幸男と共に縄文後期前半に西日本全域に見られる類似する土器は、縁帯文土器の広域分布の結果と考えた。[7]

その後、調査の増加に伴い、近畿地方でも福田ＫⅡ式土器が主体的に分布していることが判かってきた。そこで、千葉豊は1989年福田ＫⅡ式土器と北白川上層式土器をつなぐ時期として広瀬土壙40段階を設定し、縁帯文土成立のメカニズムを解明しよう試みた。[8] さらに1990年西脇対名夫は長崎県伊木力遺跡の報告書で西日本の縄文時代後期前半の土器を検討し、縁帯文土器の起源を西九州の縄文中期系の土器に求め、独自の文様変遷論から、それまで南西四国で平城Ⅰ式土器から平城Ⅱ式土器と編年されていた土器が逆転するとの見解を表した。[9]

こうした、論文を元に1992年の水ノ江和同の小池原下層式土器の細分[10]、平城Ⅰ・Ⅱ式土器論争[11]、松ノ木式土器の設定[12]が行なわれている。そして、現在では小池原上層式土器の成立にあたっては福田ＫⅡ式土器から広瀬土壙40段階・松ノ木式土器・小池原下層式土器等の土器群を経て縁帯文土器が成立し、これが小池原上層式土器の出現に大きくかかわることが明らかにされようとしている。

(3) 大分平野周辺の磨消縄文土器の編年

大分平野ではこれまで述べたように横尾貝塚や小池原貝塚の調査で縄文時代後期前半の資料が蓄積されている。最近でも、下郡遺跡群の調査で縄文土器が出土しており[13]、十分とは言えないが縄文後期前半の資料は出揃って来ている。そこで、ここではこうした資料で編年した第ｂ図を元に今回紹介した土器の位置付けと、大分平野周辺地域との関連を論じたい。

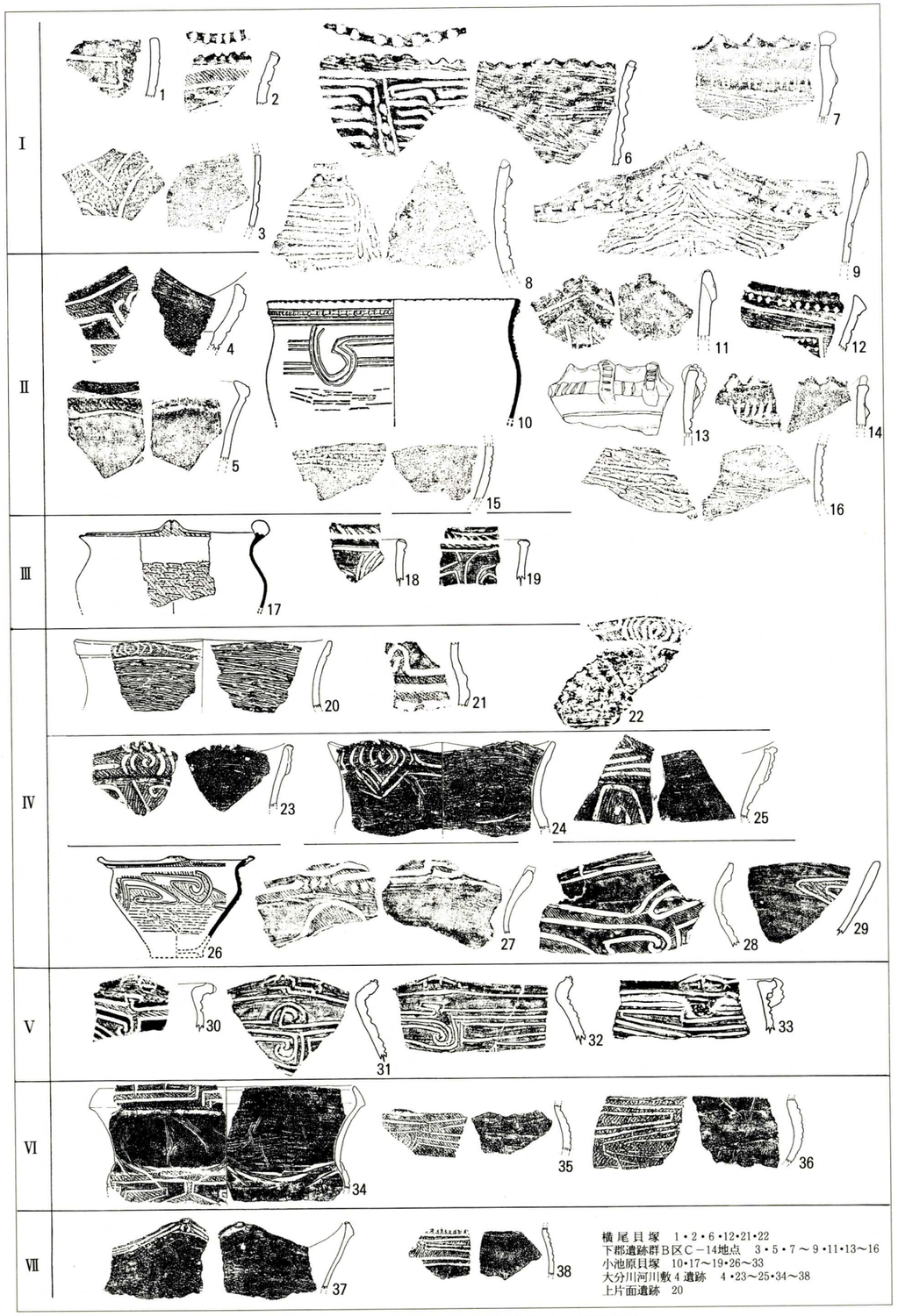
Ⅰ期

九州の縄文時代後期の始まりは、瀬戸内地方の磨消縄文が施文された中津式土器が伝播し、出現することが目安となっている。この土器は九州北部を中心に各地で出土しており、大分平野では横尾貝塚（１・２）から出土している。その出土状況は、６のような縄文中期の阿高式土器の伝統を継承した太い沈線のみで文様を描く九州在地の西和田式土器を伴うことが多く、中には両者の文様要素が折衷したものもある。横尾貝塚出土の２も、器面には磨消縄文があるものの、口唇部の太い刻目は、６の口唇部の刻目と同じ手法で刻まれており、両者の同時性を示している。この時期の遺跡としては別府湾周辺の、杵築市山迫貝塚や別府市エゴノクチ遺跡、大分川上流の湯布院町山下池遺跡等がある。

Ⅱ期

Ⅱ期は瀬戸内地方で中津式土器の次に編年されている福田ＫⅡ式土器とそれに伴う土器がある。大分平野では小池原貝塚や下郡遺跡群Ｂ地区Ｃ－14地点で出土している。この土器は三本沈線を単位で文様を描き中に磨消縄文のあるものと二本単位のものがあり、後者は宿毛式土器と呼ばれ、福田ＫⅡ式土器と区別して位置付けられている。

このように、九州の縄文時代後期初頭は瀬戸内地方の土器を基準に考えられているため、瀬戸内地方の土器型式をそのまま編年している。しかし、このⅠ・Ⅱ期の土器の出土状況は、瀬戸内系の土器が出土するものの、その量は少なく、むしろ７～16のような土器が主体を占める。この土器群の口縁部は９・11のように大きな山形口縁になるものや、口縁部に太い刻目が付くものなどがある。前者は、九州の縄文中期土器の伝統からは導きだされず、中津式土器の影響と考えられる。また、後者は明らかに、縄文中期土器の伝統を継承している。また、７～16の胴部の文様は、細い沈線で描かれており、九州の縄文中期の手法とは異なり、中津式土器や福田ＫⅡ式土器に類似する。しかし、文様構成を見ると、８は九州の中期土器の文様に類似し、10・15は福田ＫⅡ式土器と同じ三本沈線を単位とした沈線で画がかれており、15はさらに縄文のかわりに、刺突文で沈線内を埋めている。この沈線内を細い棒状の道具や放射肋のある貝殻の腹縁を刺突し埋める文様手法はこの時期の東九州の特徴的な文様で、久住町コウゴー松遺跡で、賀川光夫によりコウゴー松式土器と名付け



第６図　大分平野周辺の磨消縄文土器年図

られており[14]、その後も杵築市山迫貝塚・湯布院町山下池遺跡からも出土している。

以上のように、７～16の土器は瀬戸内地方の後期初頭土器の影響や九州の縄文中期土器の伝統が折衷された状態で、器形や文様に表現されている。これらの土器の一部は、これまで小池原下層式土器やコウゴー松式土器として理解されていた。しかし、文様や器形を分析すれば、中津式土器と福田ＫⅡ式土器にそれぞれ近い土器があり、細分と整理が必要である。

Ⅲ期

小池原下層式土器がこの時期にあたる。九州での資料は少ないが、近年明らかにされた高知県松ノ木遺跡でまとまった資料が出土している。また、千葉豊が設定した広瀬土壙40段階も同時期と考えられる。文様の特徴は、口縁端部が肥厚し、幅広の口唇部を形成する。その口唇部に沈線や斜めの刻目状の連続短沈線を加える。胴部文様は明らかかではないが、磨消縄文や沈線文が施文される。なお、Ⅰ・Ⅱ期で述べた７～16の土器の一部はこの時期まで伴う可能性がある。

Ⅳ期

Ⅲ期で西日本の縄文土器は縁帯文土器化を始める。そして、Ⅳ期になると明確な縁帯文土器が成立し、九州ではその影響を受け、小池原上層式土器の出現の方向への動きが見られる。しかし、九州での資料は少なく明確に時期を設定できるほどではない。そこで、この時期を３期に細分し論じる。

Ⅳａ期は口縁部が長く延び、頚部が無文化する。文様は長く伸びた口縁部の外面部が肥厚しつくられた幅広の文様帯と胴部にのみ施文される。口縁部の文様は、同心円文が数箇所に施文され、胴部の文様は磨消縄文であるが明確でない。この形態と文様はは、近畿地方の北白川上層式土器１期に近いと考える。九州では資料が少ないが、21や22には沈線の幅広化が見られ、小池原上層式土器化への芽生えを見ることができる。

Ⅳｂ期の資料も最近庄内町十合野遺跡で出土した資料があるものの多くはない。[15] その中で、大分川河床出土の３点は貴重である。この土器は、Ⅳａ期と次ぎのⅣｃ期をつなぐ土器として重要で、幅広の口縁部文様帯は残るものの頚部の無文帯は短くなる。また、23に見られるように、同心円文をつなぐ沈線の上部の縄文は消されていない。その一方同心円文とその上位の口唇部の刻目がつながる傾向が認められる。このよに、この土器群は小池原上層式土器の古相ととらえることができる。

Ⅳｃ期は小池原上層式土器である。口縁部の文様帯は狭くなり同心円文は簡略化され波状口縁頂部の文様と一体化する。また波頂部文様帯をつなぐ沈線の上位の縄文は磨り消される。頚部はさらに短くなり、波頂部下位に入り組み文が施文される。胴部も磨消縄文で渦巻き文や入り組文が描かれる。こうした文様は幅広い沈線で描かれ、有文土器のほとんどに磨消縄文があり、沈線文のみは少ない。こうして、この時期に北部九州地域を代表する磨消縄文土器が成立し、類似する南西四国の土器は平城式土器と呼ばれている。

Ⅴ期

Ⅴ期は鐘崎式土器である。この土器はⅣｂ期から見られる口縁部の矮小化現象がピークに達する。文様は小池原上層式土器の要素を継承するものの、磨消縄文はほとんど見られなくなり、細い沈線文のみで描かれる。この土器は安心院町飯田二反田遺跡１号住居跡・豊後高田市上野遺跡・中津市棒垣遺跡で良好な資料が出土しており、文様の分析や次のⅥ期との共伴関係などから細分が検討されている。

以上のⅣｂ期からⅤ期の土器は香川県永井遺跡[16]や鳥取県布施遺跡の出土状況から[17]、近畿地方の北白川上層式２期にあたる。

Ⅵ期

Ⅵ期になると再び口縁部が長大化した土器が出現するとともに、文様も直線的な磨消縄文を施文するようになる。また、土器組成の中に東

日本を出自とする注口土器が現われる。このようにⅥ期はⅤ期に比べると大きく土器の様相が異なり、再び他地域の影響を強く受けていることが見られる。その影響を与えた土器は長大な無文の頚部を持つ北白川上層式土器３期の可能性が強い。

この時期は九州で北久根山式土器と呼ばれているが、この土器型式の特徴である「W」字の貼りつけ文が北部九州から東九州では見られず、西九州はと様相が異なる。そこで山口信義は北九州市菊水町遺跡の資料をこの時期にあて、菊水町式土器を設定している。[18] このⅥ期の土器も菊水町式土器にあたるが、この時期の資料も最近増加しており、形態差も大きく細分が検討されている。また、西南四国の広瀬上層式土器・平城上層式土器・片粕式土器も概ねこの時期にあたる。

Ⅶ期

Ⅶ期は西平式土器である。この型式をもって東九州の磨消縄文土器は姿を消す。この土器は、最近東九州で住居跡出土の良好な資料が相次ぎ、綿貫俊一により細分案が提示されている。[19] この土器は、近畿地方の一乗寺Ｋ式土器や元住吉山Ⅰ式土器の一部と類似し、並行関係が考えられる。大分平野周辺では上片面遺跡や下戸次利光遺跡でも出土している。

４．おわりに

これまで、大分平野周辺の縄文時代のまとまった資料は、横尾貝塚と小池原貝塚だけであった。そうした中発見された大分川河床の縄文土器は、これまで大分平野で資料のなかった縄文後期後半から晩期を主体とするものである。この時期の大分県内陸部の調査と研究はある程度進行しているものの、海岸部のことはほとんど知ることはできなかった。大分川河床遺跡の資料はこうした空白部を埋める格好の資料である。また、今回紹介した縄文後期前半の資料もさまざまな問題を含んでおり、今後の研究に不可欠なものと思われる。

最後に資料の紹介を快く許可して頂いた松浪久泰氏に対し心からお礼を申しあげる次第である。

註１　幸しのぶ「大分川下流域表採の縄文土器」じかたび35　別府大学考古学専攻生　1995年
２　賀川光夫「所謂鐘ヶ崎式土器の層位出土の新例（小池原式の設定）」　大分県地方史34号　1964年
３　乙益重隆・前川威洋「縄文後期文化　九州」『新版考古学講座　第３巻　先史文化』　1964年
４　高橋信武「横尾貝塚発掘調査概報」　大分県教育委員会　1982年
５　坂本嘉弘「石原貝塚・西和田貝塚」　大分県教育委員会　1982年
６　泉拓良「近畿地方の土器」『縄文文化の研究　４　縄文土器Ⅱ』　1981年
７　田中良之・松永幸男「広域土器分布圏の諸相」　古文化談叢　第14号　1984年
８　千葉豊「緑帯文土器群の成立と展開－西日本縄文後期前半期の地域相－」史林　72巻　６号　1989年
９　西脇対名夫「伊木力遺跡出土縄文時代後期土器の検討」『伊木力遺跡』　1990年
10　水ノ江和同「小池原上層式・下層式土器に関する諸問題」　古文化談叢　第27巻　1992年
11　犬飼徹夫「愛媛県平城市の再評価」考古学ジャーナル129　1976年
前田光雄「平城式についての覚え書き－四国に於ける縄文時代後期前半の－様相－」牟邪志　第６号　武蔵考古学研究会　1993年
宮本一夫編「文京遺跡第８・９・11次調査」愛媛大学埋蔵文化財調査報告Ⅱ　愛媛大学考古学研究室　1990年
水ノ江和同「土佐井地区遺跡」大平村文化財調査報告第５輯　大平村教育委員会　1990年
12　前田光雄・出原恵三「松ノ木遺跡　Ⅰ」本山町埋蔵文化財調査報告　第３集本山町教育委員会　1992年
13　讃岐和夫・坪根伸也「下郡遺跡群」　大分市教育委員会　1990年
14　賀川光夫・橘昌信「コウゴー松遺跡調査報告」　久住町教育委員会　1974年
15　坂本嘉弘「十合野遺跡」庄内町文化財調査報告書第１集　庄内町教育委員会　1994年
16　渡辺明夫編「永井遺跡」香川県教育委員会　香川県埋蔵文化財センター　1990年
17　中野知照他「布施遺跡発掘調査報告書」鳥取県教育文化事業団調査報告書７　財団法人 鳥取県教育文化事業団　1981年
18　山口信義「菊水町遺跡（Ⅰ区の調査）」北九州市埋蔵文化財調査報告書第68集　北九州市教育文化事業団埋蔵文化材室　1988年
19　綿貫俊一「川南原遺跡群」大分県文化財調査報告書　第84輯　大分県教育委員会　1991年

教　育　普　及　活　動

ふるさとの歴史講座

（１）歴史のコース

期　間　：４月～６月の第２～４土曜日
時　間　：14：00～15：30
テーマ　：歴史と芸術
講　師　：飯沼賢司氏（別府大学助教授）
宗像健一氏（大分県立芸術会館学芸課長）
古賀道夫氏（大分県立芸術会館学芸員）
宮崎　治氏（大分市文化振興課美術館建設準備室技師）
高橋　徹（当　館）
武富雅宣（当　館）
長田弘通（当　館）

実施日と内容

実施日	内　　容	講　師	受講者
４月			
９日	原始絵画と人	高橋　徹	99人
16日	絵図と史料にみる由原八幡宮	武富雅宣	98
23日	大友宗麟と芸術	長田弘通	80
５月			
14日	荘園絵図について	飯沼賢司　氏	84
21日	絵図にみる村の世界	長田弘通	87
28日	田能村竹田と豊後南画	宗像健一　氏	77
６月			
11日	歌川豊春と観梅図	古賀通夫　氏	78
18日	日本美術の近代化－絵画を中心として	宮崎　治　氏	74
25日	後藤碩田と『大化帖』	武富雅宣	90

のべ受講者数　767人

（２）考古のコース

期　間　：７月～９月　第２～４土曜日
時　間　：14：00～15：30
テーマ　：大分県の歴史考古学状況
講　師　：賀川光夫氏（別府大学文学部教授）
村上久和氏（大分県教育庁文化課主査）
宮内克巳氏（大分県教育庁文化課主査）
乙咩政己氏（宇佐市教育委員会文化課主査）
小柳和宏氏（大分県教育庁文化課主任）
吉田　寛氏（大分県教育庁文化課主事）
木村幾多郎（当　館）
高橋　徹　（当　館）

実施日	内　　容	講　師	受講者
７月			
９日	風水思想と大分	木村幾多郎	94人
16日	古代の道	高橋　徹	81
23日	九重の釘野遺跡	小柳和宏　氏	81
８月			
13日	岡城の馬場	吉田　寛　氏	44
20日	大分の石塔	村上久和　氏	64
27日	一万田館跡	宮内克巳　氏	76
９月			
３日	三光村瑞雲寺廃寺	村上久和　氏	54
10日	宇佐地域の山城	乙咩政己　氏	77
17日	江戸時代の考古学	賀川光夫　氏	80

のべ受講者数　651人

（３）民俗のコース

期　間　：10月～12月　第２～４土曜日
時　間　：14：00～15：30
テーマ：大分県の民俗
講　師：塔鼻勝人氏（大分県立宇佐風土記の丘歴史民俗資料館館長）
段上達雄氏（　同　　上　主任研究員）
小泊立矢氏（大分県文化課主幹）
染谷多喜男氏（大分県文化財審議員）
小玉洋美氏（元日出高校教諭）
大野和則（当　館）

実施日	内　　容	講　師	受講者
10月			
８日	柳田国男の時代と民俗学	大野和則	100人
15日	年中行事から見た日本文化	段上達雄　氏	86
22日	小一郎神について	小玉洋美　氏	84
11月			
12日	地名の話（その１）	染谷多喜男氏	87
19日	農民の祈り	小泊立矢　氏	87
26日	森と海の民俗	塔鼻勝人　氏	85
12月			
10日	地名の話（その２）	染谷多喜男氏	86
17日	結婚と家の習俗	段上達雄　氏	94

のべ受講者数　709人

（４）古文書のコース

「豊国紀行」をテキストとし、受講者が解読する実践的中級古文書解読講座とした。

資　料　収　集

資料収集委員会

1．会議

第1回　平成6年11月1日(火)
場　所　大分市歴史資料館会議室
議　題　(1)購入予定資料の審議について
　　(2)その他

第2回　平成7年3月9日(木)
場　所　大分市歴史資料館会議室
議　題　(1)購入予定資料の審議について
　　(2)今年度収集資料について
　　(3)その他

2．委員名簿

氏　　名	役　　職	分　　野
賀川　光夫	別府大学文学部教授	日本考古学
加藤　知弘	大分県立芸術文化短期大学教授	日本海外交流史
豊田　寛三	大分大学教育学部教授	日本近世史
菊竹　淳一	九州大学文学部教授	日本美術史
段上　達雄	大分県立宇佐風土記の丘歴史民俗資料館主任研究員	日本民俗学
加賀　稔豊	大分市助役	地方行政

寄　贈

(1)和服　6点　　金丸征生氏
男性用羽織、男性用袴、女性用紋付、女性用白無垢中着、男性用縦縞普段着、女性用縦縞普段着

(2)提灯製作道具　66組　　得丸絹代氏
小型45組、大型21組

(3)機織り機　1点　　田中秀明氏

(4)藁製品及び作成具他　23点　　安達庸男氏
莚、莚打ち、ホゴ1組、藁袋、籾入れ袋、ハツリ、コビキノコ、山林用草刈鎌、バラショウケ、バラのせ台、稚蚕用網2、藁切りバサミ、藁打ち、フタマタ鍬、ジャレンホグスイ、アセリ棒、豆腐桶、醤油桶、墨壷、投網

(5)農具他　17点　　安東　凌氏
千歯コキ、田植え具、田植え綱巻き2、杵まぜ棒、七島ヘギ2、長火鉢、版木、謄写版、ツヅラ、製蒸し器、竹筒型検査具2、モーガ、俵切り、田植え綱、田植え定規、コガラ

(6)農具　5点　　若杉延太郎氏

寄　託

(1)食器、武具　18点　　笠木量巳氏
磁器製壷、木製茶壷、木製皿5、サンゴ製ひょうたん6、サンゴ、鹿角、薙なた柄、薙なた〆金具、刀

(2)杵原八幡宮旧坊宮迫坊伝来仏像他　16点　　河野寿宣氏
大日如来坐像、不動明王立像、歓喜天像、明王立像、愛染明王坐像、子安弘法大師像神像形土鈴、稲荷明神、小厨子、花瓶2、柄鏡、和鏡、御正体、みくじ箱

宮迫坊は杵原八幡宮を構成する坊として中世からその名が見え、近世まで続いた数少ない坊である。不動明王立像は室町時代の作で、坊の由緒を物語っていよう。「府内及び大友氏関係遺跡総合調査」で確認され、寄託を受けた。

購　入

(1)戸次文書　22点　戦国～江戸時代
大友氏一族戸次氏から分かれた臼杵氏の末裔に伝来した文書群。内容は戦国時代では大友宗麟・義統父子の書状3点、江戸時代では大友宗家からの書状4点、大友松野家からの書状5点、その他中世文書の写し4点、「大友義統高麗陣着到」を含む記録類6点である。

(2)大友義鑑書状　1通　　年未詳9月15日
深田鑑忠・古庄五郎左衛門尉にあて、漆の実調達を命じた書状。『大分縣史料』12所収「深田文書」中の1通。

(3)大友義統書状　1通　（天正11年）12月3日
天正11年（1583）大友氏に反した宇佐宮神官等討伐に際し、妙見岳城督田原紹忍の下で働いた田原七郎にあてた感状。

(4)府内藩歴代藩主書状　1巻31通
歴代府内藩主が家老など重臣らに宛てた手紙をまとめたもの。内訳は6代近儔12通、8代近訓11通、9代近信2通、10代近説4通、12代近孝2通となっている。

(5)脇蘭室関係文書　29冊　江戸時代後期
佐藤益三氏旧蔵の脇蘭室関係資料。うち「顔子」・「竹山先生答問書」・「蘭室蔵本標記」は蘭室自筆本として『脇蘭室全集』（昭和5年刊）の底本とされている。

(6)鶴崎船方関係文書　36冊　江戸時代
熊本藩領鶴崎の船方関係史料。御船手衆名や屋敷の広さを記した宝暦7年（1757）の帳簿、「御船歌」を書き留めたものなどがある。

(7)大分郡米良村関係文書　42点　　江戸～明治時代
幕府及び延岡藩領であった米良村（大分市）に関する文書。年貢割付状、類族帳、相論関係文書、元禄14年（1701）の村絵図扣がある。

(8)速見郡野多村関係史料　229点　　江戸～明治時代
幕府領速見郡野多（田）村（杵築市）に関する文書。寛延4年（1751）の五人組前書を初め名寄帳、江戸～明治時代の質地証文等がある。中でも明治3年と考えられる「豊後国速見郡野多戸籍」は「壬申戸籍」に先行するものとして興味深い。また、杵築城絵図も含まれている。

(9)速見郡石垣村関係史料　81点　　江戸～明治時代
幕府領石垣村（別府市）に関する文書。主に森藩領鶴見村との秣場をめぐる相論関係史料や絵図を収める。また、明治時代の字図もある。

(10)由原八景　1冊　文政7年（1824）刊
久我惟道ら8人の公卿が杵原八幡宮付近の景色を詠んだ歌に絵を付して出版したもの。題言には、絵は府内藩絵師木崎隆川作とある。

(11)『改正増補　訳鍵』前後編　2冊　　安政4年（1857）
越前大野藩士広田憲寛が文化7年（1810）刊の『訳鍵』に12､000語を追加し、刊行したオランダ語辞典。

(12)「救荒植物集説」　1冊　写本　　明治時代
日本本草学の三大家に数えられる伊藤圭介が明治17年に纂述し、賀来飛霞が筆記したもの。

(13)立体メガネ一式　182点　　明治時代
Keystone View Company 社製のステレオスコープとそれで見るための日本と世界の名所や風俗を撮影した写真 181枚。

(14)『豊後切支丹史料』　1冊　昭和17年刊

(15)『史蹟名勝天然記念物調査報告』　11冊　　大正11年～昭和11年刊

(16)大分県関係近代資料　19点

①大分県達令書	1冊	明治12年
②大分県月報綴	1冊	明治12年
③県治条令	1冊	
④大分県罰令類纂	1冊	明治26年
⑤大分県訓令	1冊	明治31年
⑥大分県県報	1冊	明治32年
⑦大分県勢要覧	1冊	明治39年
⑧徴兵資料	5点	明治時代
⑨大分県勢一班	1冊	明治43年
⑩大分新聞第85号付録	1点	明治22年刊
⑪大分県虎列刺病資料	1冊	明治12年刊
⑫大分県立二豊荘一覧	1冊	昭和14年

⒀鶴川、国東町青年会規則　2冊
⒁在京大分県人会員名簿　1冊　昭和26年
⒂大分県警防計画書　1冊　昭和11年
⒃大分県消防操法要領　1冊　不明

明治時代から昭和初期までの大分県政・行政に関する資料。⑩は明治22年10月に新築なった県会議事堂についての特集記事で、建物正面の絵が掲載されている。

⒄大分県産業関係資料　5点
①大分県産業案内　1冊　明治43年
②大分県農工銀行営業報告　1冊　明治33年
③大分県立農事試験場事業成績　1冊　大正15年
④水稲組合採種圃経営の概況　1冊　大正15年
⑤大分県の畜産　1冊　大正9年
⑥大分県の畜産と畜産組合　1冊　昭和5年

⒅大分県交通関係資料
①豊州本線時刻表　1冊　大正10年
②列車時刻表　1冊　大正15年
③豊州線日出－別府間開通記念絵はがき　1揃　明治44年
④日豊線全線開通絵はがき　1揃　大正12年
⑤久大東線湯平－北由布間開通記念絵はがき　1揃　大正14年
⑥久大線全線開通絵はがき　1揃　昭和9年

③～⑥は開通記念に出された駅舎や沿線の風景を撮影した絵はがき。

⒆各種共進会関係資料
①九州沖縄八県連合共進会会場図　1点　明治21年
②同共進会会場一覧　1点　大正10年
③大分県全国特産品展覧即売会ポスター　1点
④全国農共進会出品目録　1冊　大正15年

①明治21年初めて大分で九州沖縄共進会が開かれた時の会場の銅版画。場所は中堀跡の南新地。②は大正10年新川を中心に開かれた共進会の会場図を付した大分市街地図。

⒇大分県関係写真資料
①『大分県写真帖』　1冊　明治40年刊
②柞原八幡宮絵はがき　1セット
③大分名勝絵はがき　1セット
④大分名所絵はがき　18枚

㉑大分市関係資料
①大分市勢一覧表　1点　昭和10年
②大分市勢要覧　4冊　昭和25・26・27・30年
③鶴崎町等地券　14点　明治時代
④大分市案内　1冊　昭和14年

㉒大分町・西大分町関係資料　21冊

大分町・西大分町・荏隈村・豊府村が合併し新大分町が誕生した明治40年前後の新大分町と西大分町に関する行政資料。

㉓安部碩田関係資料　147点

『柞原八幡宮志』（大正12年刊）の著者安部碩田の収集資料。

㉔戦災で消えた大分市中心部復元絵図　6枚

加藤貞弘氏が記憶や聞き取り調査により復元した昭和16年ころの大分市中心部の町並みを首藤詔子氏が描いた絵図。

㉕大分県管内地図　1点　明治14年

出版された大分県地図としては最古の地図。

㉖大日本分国輿地全図・九州　1点　明治10年

㉗明治～昭和初期の教科書　117冊

戦前に県内で使用されていた国定教科書。県下で出版された明治期の教科書6冊を含む。

㉘双　六
①笑門福々双六　1枚　明治時代
②中国・九州旅行双六　1枚　昭和4年
③映画スタア双六　1枚　昭和前期
④活劇王双六　1枚　昭和30年代
⑤動物マンガ双六　1枚　昭和30年代
⑥のりものすごろく　1枚　昭和30年代
⑦スポーツすごろく　1枚　昭和30年代

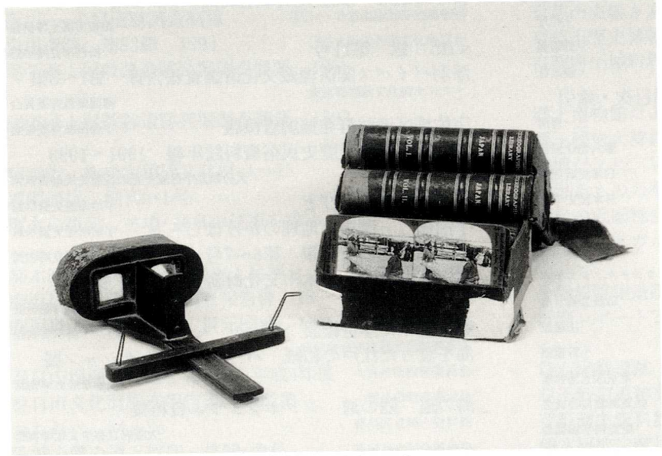
特に昭和初期から30年代までの社会風俗を反映した双六。

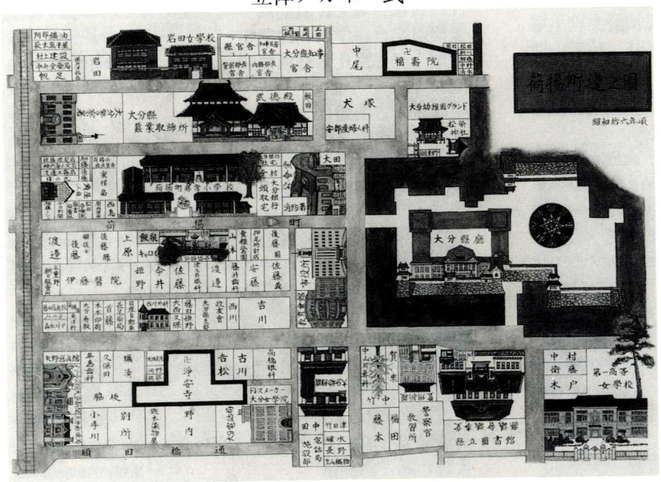
㉙銅　矛　1点　大分市名辺山谷出土

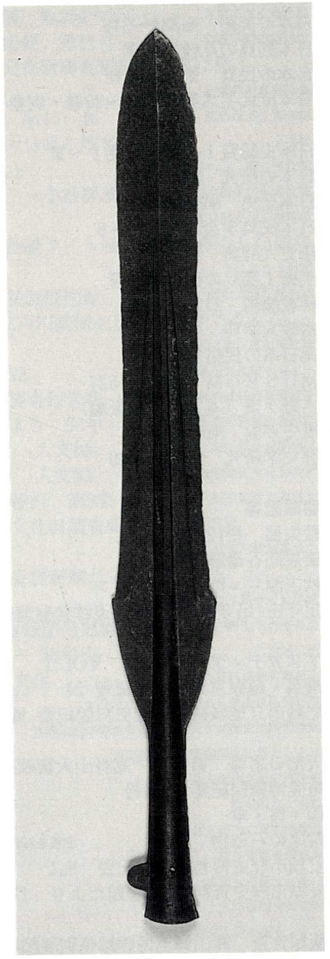
文政9年（1825）に熊本藩領木田村名辺山谷（大分市坂ノ市）から発見された銅戈3本と銅矛2本のうちの1点。佐賀関早吸姫神社の旧神官家伝来品。発見された銅矛は1本を熊本へ差出し、1本を熊本藩佐賀関会所が所蔵しており これが神官家に伝来したと考えられる。

不動明王立像（河野寿宣氏）

鶴崎船方関係文書


立体メガネ一式


戦災で消えた大分市中心部復元絵図


銅　矛

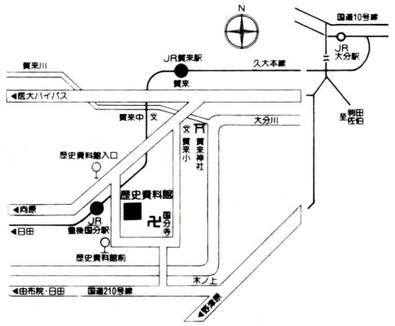
利　用　案　内

開館時間　午前9:00～午後5:00
（入館は午後4:30まで）

休 館 日　月曜日（祝日にあたるときは翌日）
祝日の翌日
年末年始（12月28日～1月4日）

観 覧 料　大　　人　200円（団体150円）
小中高生　100円（団体50円）
（市内の小学生は無料です）
＊　団体は30名以上
＊　特別展の開催中は別料金になる場合があります。

交通機関　ＪＲ久大線
○豊後国分駅下車
大分バス
○歴史資料館前下車
歴史資料館前ゆき（松ヶ丘経由）
（木ノ上経由）
○歴史資料館入口下車
国分新町ゆき
向原ゆき（賀来経由）
今畑ゆき（　〃　）
中村ゆき（　〃　）
竜原ゆき（　〃　）



大分市歴史資料館年報
1995
発　行　日　平成７年９月30日
編集・発行　大分市歴史資料館
大分市大字国分960番地の１
〒870　　(0975)49－０８８０